NO.01

働きすぎ黒書　ニュース

全日本教職員組合（全教）生権局
2006 年 6 月 15 日　東京都千代田区二番町 12-1　３Ｆ

長時間・過密労働の解消を

文部科学省は、給特法をたてに「教職員の勤務は適切に行われているものと考えている」とし、教職員の深刻な長時間・過密労働と健康破壊の実態が放置され続けてきました。しかし、人確法廃止など教員賃金水準を削減する圧力への「対応策」とはいえ、教職員の超過勤務の実態を認めざるを得なくなり、全国的な調査もおこなわれます。

教職員の実態は一部マスコミで取り上げられていますが、まだまだその深刻さは父母・国民に明らかにされていません。もっと社会的にも訴える必要があると、手記を募集しています。ニュースで紹介していきます。

黒い色のクレヨン　　埼教組

今から考えると、仕事が全生活の殆どの２年間だった。担任は５・６年生と持ち上がった。２クラスの学年で、クラスの子どもは満杯に近い３９人。初めての学年主任と生徒指導主任。となりのクラスは、６年生で担任が代わったものの、学級がきちんと機能しないという状況が続き、実質、学年の仕事は、一人で切り盛りすることが多かった。

５年生担任当時、わが子は小４と２歳の男の子。病気の父親もかかえていた。２年間、レジャーでどこかに出かけたことといえば、家族で行った赤城の下見だけ。地蔵岳に登り、小４の息子は大喜び。だいたい、土日のどちらかは出勤し、夕方、保育園と学童に迎えにいって「再出勤」。夫が帰っていれば、子どもを家におき、夫の帰りが遅ければ車の中で、コンビニのおにぎりを食べさせて、２人の子どもを連れて再出勤。子どもの病気の時は、夫が病院へ連れて行き、父親の入院の世話や手術の立ち会いも夫がやった。

一番大変だったのが、文科省の委嘱を受けた研究授業の授業者になった時。その前日は、再出勤でも間に合わず、子どもたち２人を保健室のベッドに寝かせ、仕事をし、深夜０時に学校を出た。２時まで仕事をした人もいる。

辛かったのは、下の子どもが保育園の中で、問題を起こすようになったこと。絵を描く時は、黒い色のクレヨンを使うことが多かった。昨年まで、楽しげに参加できたお遊戯会、その年は、泣いて嫌がり、舞台の上にたっても何もしなかった。

どんなに忙しくても、倒れるわけにはいかないと思い、サプリメントを何種類も飲み、緊張した日々だった。今、職場が変わり、再出勤も休日出勤もしていない。和太鼓を習う余裕もでき、自分の趣味の時間もある。人間らしい生活の大切さを痛感している今である。

家族からの告発など、実態をぜひお寄せください！